

KOSHIKI ZINE

小さいけれど、ここにある



KOSHIKI TOURISM

小さいけれど、ここにある

KOSHIKI ZINE

第3号

何気ない日常にちょっぴりじ〜んとくる。
小さな島の暮らしと、此処に生きる甌島人を追う地域密着タブロイド。



甌に生きる島人 勝丸 濱田敏宏さん
特集 西海岸に魅せられた島人
こしきの島時間 茶やみっちり中鴻ヒミさん・史也さん
アコウの木の下で 室原さん家族
編集後記

甌に生きる島人

VOL. 03

勝丸 濱田敏宏さん

「子どもたちとの時間をつくりたい」と、心機一転大阪から下甌島・手打へ移住し、三十四歳のときに漁師へと転身した濱田さんは、移住して二十二年目を迎えました。四人の子どもたちは島立ちし、現在は夫婦ふたりの島暮らし。勝丸の従業員として、漁に出る傍ら、魚の燻製作りや、魚にまつわるイベントの運営に取り組んでいます。



定置網で魚をする際、狙いのマグロやカツオと一緒に網にかかるシイラは、値がつかないため、獲れても出荷できない存在でした。そんなシイラをもったいないと思っていたところ、観光案内所で働いていた若者から、魚を燻製にしたお土産をつくってみては、と提案を受けたことをきっかけに、独学で燻製作りをスタートした濱田さん。「おいしいかどうかは、子どもがイチばん分かる」と、子どもたちが試食係だったそう。



※現在、島内では長浜港と里港の売店で販売中。

「小さくても、続けることが一番大事」

大阪府出身の濱田さんは、自然に囲まれた環境で子どもたちと生活したいと思い、第二子が生まれたのちに、田舎への移住を考えていました。そこで、一次産業の後継者を募る移住フェアに参加し、農林水産に関わる様々な職種を見学。もともと釣りを趣味にしていた濱田さんは、特に漁業に興味を持ち、漁業体験ができるという下甌島へと足を運びます。そこで出会ったのが、現在従事している勝丸の親方でした。この体験を通して、「この人らとやったらええなあ」と、実感。また、下甌村役場(当時)の方から、仕事や住まいのことに対しての手厚いサポートがあったことが後押しし、三十四歳のときに、奥さんとふたりの子どもたちとともに、移住を決意しました。

移住後は、家族が馴染めるかどうかが大変だったと、当時を振り返る濱田さん。実際に暮らし始めると、仕事をしながらも、学校行事や地域のお祭りにも参加でき、目の前で子どもたちの成長を見守ることができました。濱田さん一家には、さらにふたりの子どもも生まれ、家族六人で、思い描いていた島での暮らしを実現しました。

その後、二〇二十年には、四人の兄弟姉妹の末っ子が島立ちの日を迎えました。子どもたちは親元を離れ、島での子育てを終えた濱田さん。現在は、漁師を続ける傍ら、シイラやブリを燻製したお土産づくりや、漁協の組合員のひとりとして、「手打おさかな祭り」の運営にも率先的に取り組み、鮮魚の試食や販売、魚の捌き方教室や地引網の体験などを行っています。漁師町の父として、この土地だからできること、ここにある宝ものを活かして、豊かな海とここの暮らしが続いていくことを願っています。

いずれは、燻製作りができる作業場を持ちたい、地魚を直売できる形を作りたい、と夢を語る濱田さん。漁師の数も島の人口も減りゆくなかで不安もあります。が、「辞めたらアカンよな。小さくても続けることが一番大事やんな」とこれからの島の未来を見つめています。



休日にも関わらず、船の世話をしにきていた勝丸の最年長の乗船員さん。「あんなおじいにならなければええよなあ」と濱田さん。

西海岸に魅せられた島人

下甌島の西海岸には、鹿島・内川内・瀬々野浦・片野浦の四つの集落があります。海からの強い風が吹き付ける西海岸エリアには、古くはおよそ8,000万年前の白亜紀後期の地層から成る断崖が剥き出しになっていたり、波風の侵食により形成されたナポレオン岩に代表される奇岩や海蝕洞が点在しています。近年では、アジアでも珍しい恐竜の化石が発掘されるなど、冒険心がくすぐられるエリアです。そんな西海岸に暮らす島人に、その魅力を教えてもらいました。

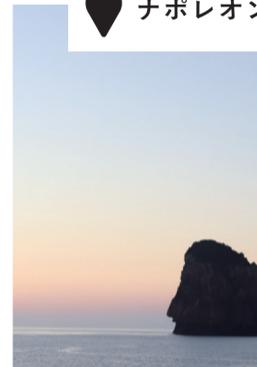


シーカヤック Brinkl!
近藤悠斗さん

十代半ばより騎手となることを目指し、オセアニア・アジア・ヨーロッパ諸国での海外生活も経験した近藤さん。落馬による負傷を機に、競走馬の世界から離れた際、「よし、マングローブへ行こう!」と心機一転。人里離れた僻地を探し、沖縄県・西表島へ移住。カヤックガイドや遊覧船の船長として、旅行者と自然を楽しむ日々を過ごしていました。しかし、環境保護を省みず、観光地化が進んでいく状況に辟易。エコツーリズムの創生から携わろうと、次なるフィールドを求めて、島々を渡り歩き、出会った下甌島。迫力ある断崖や奇岩に、荒削りの洞窟…まさに理想の辺境地でした。さらなる奥地を目指し、2016年に、瀬々野浦へ移住。現在は、自然と共生することを心がけたシーカヤックのツアーガイドをしています。



シーカヤック Brinkl!
ホームページはこちら



ナポレオン岩

「西海岸の厳しい自然環境に惹かれた」と話す近藤さん。目の前にそびえ立つ断崖には、地球の太古の歴史が積み重なっています。自分たちが生きているこの時代は、ほんの一瞬なんだ。そんな自然に対する畏怖を感じられるのも、このツアーの醍醐味です。甌島の海へと繰り出し、海面から見上げる高さの断崖に圧倒されつつ、カヤックでなければ入れない海蝕洞へと漕ぎ進める。海原で出会う野鳥や魚・貝などの生き物たちとの出会いに好奇心がくすぐられます。

鹿島
鹿島断崖



内川内
宮野豊香さん

自宅の庭で育てていた紫陽花は、自分の気持ちを明るくしてくれた花でした。その花で、紫陽花ロードをつくりたい。その想いで、内川内集落の道路沿いの藪を切り開き、少しずつその距離を伸ばしながら、宮野さんがひとつずつ挿し木で植えました。手塩に掛けて育てた紫陽花。「雨が降ると嬉しいの」と宮野さんは話します。花が咲き揃う梅雨時期は、集落へと続く山道が鮮やかに彩られます。

紫陽花ロード



甌島列島最高峰の尾岳（標高604m）の山間に位置する内川内集落。標高の高さから、場所によっては7月上旬まで、色とりどりの紫陽花が咲き乱れる景色を楽しめます。また、2020年に甌島橋が開通してからは、内川内にある紫陽花ロードの噂を聞きつけた島民が、上甌島から訪れ、写真撮影を楽しむ姿も見られるようになりました。一軒の庭からはじまった紫陽花は、今や集落へと訪れる人々の心の癒しにもなっています。

鹿島断崖



幾重にも重なり合った地層には、生き物の進化や絶滅、大陸の移動など、地球に起きた変化の記録が残されています。その痕跡から、当時の様子を推察する地質研究には、「本のページをめくるような面白さがある」と語る三宅さん。わたしたちの生きる時代を超え、壮大なスケールで物事を語る地学には、「時間や空間に対する尺度を持ち、視野が広がることで、学んだひとの人生を助けると思う」。ミュージアムでのアカデミックな解説はもちろん、実際に鹿島断崖に訪れ、目で見て感じることで、その感覚はきっと深まるはずです。



地域おこし協力隊
中瀬史也さん

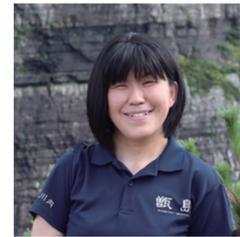
下甌町・片野浦出身の中瀬さん。現在は、片野浦の地域おこし協力隊として、「みっちり草原」の観光資源化に力を入れています。週に一度はみっちり草原までの山道を歩き、日々草刈りや遊歩道の整備に汗を流しています。その傍ら、今年4月にオープンした喫茶店「茶やみっちり」の店長として、みっちり草原に訪れる旅人をもてなし、地場産品をつかったメニューづくりにも取り組んでいます。

「みっちり草原」は、ユリの自生地です。例年7月頃には、美しいオレンジ色を魅せるニシノハマカンゾウが咲き、8月には、カノコユリが見頃を迎えます。片道およそ20分の山道を登り、たどり着くみっちり草原。登山道には、登山者の心を癒す、遊び心溢れる手書き看板も。木々の間をくぐり抜け、草原に到着すると、目に入ってくるのは、果てしなく広がる海に、突き抜ける青空、色鮮やかに咲くユリ…登山の達成感も相まり、気持ちの良い開放感に包まれます。

『みっちり』の語源

語源あるそうですが、中瀬さんの調べによると…

片野浦の農業用語「みずしり（田んぼの排水路）」が由来。草原の麓には、山間から流れる川が海へと流れ込み、釣り人が足繫く通う釣り場があります。その場が、農業用語に似て「みずしり」と呼ばれていましたが、次第にその言葉が訛って「みっちり」と呼ばれるようになったそうです。



甌ミュージアム
恐竜化石等準備室
三宅優佳さん

理科の教師を志し、熊本大学理学部に進学。在学中に化石発掘調査をしていた教授から声をかけられ、当初は、教授のお手伝いとして下甌島・鹿島町に上陸しました。フィールドワークを通して、地学の面白さに魅せられた三宅さんは、姫浦層群を研究テーマに掲げ、大学院時代のおよそ4分の1を鹿島町で過ごすことになりました。その後、2015年の甌ミュージアム恐竜化石等準備室立ち上げの際に、専門職員として、鹿島町へ本格移住。現在は、地元の子どもたちと行うワークショップや、月刊紙「化石だより」などを通じ、鹿島町の住民とのふれあいを大切にしながら、2025年度オープン予定の博物館の準備に奔走しています。



甌ミュージアム恐竜化石等準備室

〒896-1301 鹿島町関牟田1457-10
問い合わせ：09969-4-2211
営業時間：9:00～17:00
休日：土日祝は1階のみ開館
年末年始
入館料：無料



この看板を目印に！
鹿島町内には、至る所に、恐竜の絵が描かれていたり、シルエットを模った看板があります。実は、地元の方の手でつくられた看板なんだそう！ぜひ探してみてください。

みっちり草原



「茶やみっちり」については
次のページへ…

こしきの島時間



下甌島・片野浦 茶や みっちり

中潟ヒミさん・史也さん

片野浦生まれの中潟ヒミさんと息子の史也さん。平成24年度に閉校した子岳小学校の卒業生です。おふたりは、現在『子岳なんとかし隊』のメンバーとして、荒地を開拓して花畑や野菜畑づくりや、地域の草刈りのボランティアをはじめ、大名筍や長命草などの土地に根付いた商品開発など、片野浦を舞台に多岐に渡る活動に取り組んでいます。



茶や みっちり

〒896-1602 下甌町片野浦
現在、改装工事のため休業中
2023年4月より営業再開予定

子岳なんとかし隊
Facebookページにて
情報更新中!

下甌島・片野浦出身の中潟ヒミさんと息子の史也さん。子岳地区コミュニティ協議会が運営する『子岳なんとかし隊』のおふたりは、みっちり草原の観光資源化に取り組んでいます。2022年4月には、みっちり草原へ訪れた旅人をもてなす場として『茶や みっちり』をオープン。開業までの道のりを伺いました。

遡ること2年前、コロナ禍での転職活動を機に、2020年4月に下甌島へ帰郷した史也さんは、タイミングよく募集中だった地域おこし協力隊となり、母ヒミさんの率いる『子岳なんとかし隊』へ入隊。「僕のメインミッションは、みっちり草原の観光資源化です」と史也さん。週に一度は、みっちり草原へと向かう山道を登り、自生しているユリの成長を見守ります。また、ヒミさんとともに、登山道の整備や、みっちり草原に自生している百合を守るための遊歩道づくりに取り組んでいます。

そして、この度開業した『茶や みっちり』もまた、みっちり草原の観光資源化へ繋がる一手です。お店は、元キャンプ場のバンガロー。大工経験のあるヒミさんと、手先が器用な史也さん、おふたりの手で改修された店内は、一枚板から作り出したテーブルや、手染めの暖簾、片野浦の方言で描かれた手作りの絵本などに囲まれ、心温まる空間です。メニューには、草花を使った料理を趣味とするヒミさんが「せっかくだから、土地のものを食べてもらいたい」と、片野浦の郷土料理おしだごをはじめ、長命草のパスタや、史也さんが獲ったテングサで作ったトコロテンなど、この土地の風土に根ざしたものが並びます。新メニューを出す前には、いつも地元の常連さんに試食してもらい、反応を見てメニューになるそうです。これからも常連さんお墨付きメニューが続々登場予定です。

地元のひとを訪れる『茶や みっちり』は、地域のひとびとにとっての語らい場、そして、みっちり草原へと訪れる旅人の憩い場になっています。

『子岳なんとかし隊』とは？

結成のきっかけは、20年以上前に遡ります。当時、子岳小学校に勤務していたヒミさんは、音楽専科の教頭先生の発案で「片野浦音頭」の制作に携わるようになりました。地元の方へ作詞を呼びかけ、自分たちの村を歌う曲が完成。音源化を願っていたヒミさんですが、当時はなかなか思うように事が進みませんでした。退職後、時間ができたヒミさんは、「片野浦音頭を音源化したい」と一念発起。学生時代からの友人や、歌手の姉に声をかけました。楽曲制作から20年以上の時を経て、ついに、2019年に片野浦音頭の音源化に漕ぎつきました。この楽曲制作をきっかけに、集まったヒミさんの同級生5人と、「地元をなんとかしたい!」という思いで『子岳なんとかし隊』を結成しました。

アコウの木の下で

海の近くにあったアコウの木の下は、木陰が少ない海辺で貴重なみんなの憩い場。

漁師さんが網を修繕していたり、猫が毛繕いをしていたり、子どもたちの放課後の遊び場になっていたり。そこは、島のうわさ話が集まる場所でもありました。そんな日々を懐かしみこのコーナーでは、最近話題の人にまつわるものごとを紹介しています。



今回、インタビューさせていただいたのは、下甌島の手打に暮らす室原家。元気いっぱいな三姉妹と、移住3年目に新たなチャレンジへ挑む室原夫妻に、お話しを伺いました。



写真左から、母の那都実さん、三女・清ちゃん、長女・環ちゃん、次女・千癒ちゃん、そして父の蒼伶さん。手打湾を望むバルコニーにて。

医師として下甌島へ赴任

2019年3月、父・蒼伶さんが手打診療所で勤務することを機に下甌島へ移住した室原家。以前より、僻地医療に携わっていた蒼伶さんとともに、隠岐や五島など、各地での生活も経験した室原家ですが、「ここでは、はじめから地域の一部になっている感覚があった」と那都実さんは来島当初を振り返ります。

2022年3月に診療所での任期終了後もなお「この島で子育てをしたい」と、室原夫婦は三姉妹とともに家族5人の島暮らしを続けています。



「島での子育ては楽しい!」と室原夫婦。子どもたちがのびのびと遊べる環境はもちろんのこと、島民の優しさが、子育てのしやすさに繋がっています。忙しくしていると、近所の方から「子どもたちを連れておいでね」と電話が鳴ることも。また、三女・清ちゃんの出産で那都実さんが家を留守にしていた時期は、食べきれないほどの差し入れを届けてくださったこともあるそうです。

島で子育てをし、生業をもつ

島で生活するには生業を、と医師時代から取り組んでいた耕作放棄地の再生と米作りをしたり、患者さんから受け継いだピワ畑や、知り合いのシェフに後押しされ、唐辛子づくりに挑戦したり。日々、夫婦ではじめての連続に出逢いながら畑仕事に精を出します。



この日は、自宅の庭に生えていた竹を伐採し、ヘチマを這わせる支柱を作りました。「自分もわからないけど、やってみる」と笑う蒼伶さん。まずやってみる。その姿は子どもたちにも伝わっています。

小さいけれど、大切なこと

最近では、医療と福祉の間に抜け落ちてしまう小さな困りごとを解決する『御用聞き』をはじめた室原夫妻。そんな室原夫婦の思う暮らしの豊かさを尋ねると、「ちっちゃい挨拶ができることかな」と蒼伶さん。



那都実さんの御用聞き初仕事は、電球交換。交換のために各部屋を移動するたび、ご依頼主の方も一緒に付き添い、終始おしゃべりを楽しんでいたそう。ただ困りごとを解決するだけでなく、楽しい会話も大切な仕事です。

実際、取材中も遠くから「おーい」と呼び声がかかったり、出会い頭に「今日は何をするの?」と井戸端会議がはじまったりすることも。「大きくなったね」と、我が子に向けるような眼差しで、三姉妹を見守る地域の方々に出会いました。そんな小さな挨拶、小さな会話がこの土地での暮らしやすさに繋がっています。

この地に根付いた生業や、新たな仕事を通して、この島に暮らす豊かさを自らの手でつくりだしていく室原夫婦と三姉妹のこれからの楽しみですね。

室原家の今後は、蒼伶さんのブログにて!



第3号、ご覧いただきありがとうございます。ふと「働くとは?」と答えのない疑問を持つことがあります。世の中には、ありとあらゆる仕事があり、働き方自体も近年で大きく変わりました。取材させていただいた皆さんも、この島でそれぞれの仕事や役目をお持ちです。今回の取材を通して、ひとつ気づいたことは、どの仕事にも誰かを支えるための役割があるということ。それは、直接目に見えないこともあったりしますが、自分の役目を見つけて、その役目を全うする。そんな生き方を選んでいけたらいいな、と思います。(古賀)

取材にご協力いただいた島民の皆様へ御礼申し上げます。

発行元 甌島ツーリズム推進協議会 観光振興部会
企画 石原功一 / 齊藤智頭 / 溝上一樹 / 瀧津岳大 / 山下賢太
編集・デザイン 古賀愛深
表紙写真 コセリエ
監修 東シナ海の小さな島ブランド株式会社
お問い合わせ info@island-ecs.jp

※本紙に掲載されている内容の無断転載・転用及び盗用などの行為はご遠慮ください。



2022 AUTUMN
KOSHIKI ZINE Vol.03